

座談会 「21世紀の地方行政の姿」から

木村 木村 功 多賀 多賀久雄

司会 なぜ今地方分権なのか。

多賀 今、国会で審議しておるボリュームというのは非常に多ございまして、例えば、外交とか防衛という国しかできない問題、もっときっちりやらなければならない問題がたくさんあるにも関わらず、そこにあまり労力が割けない、というような問題があるので、こういった点からでもやはり、分担をしていくという発想が必要になってくるんじゃないかなというのが一点でございます。それから、あまりにも東京に一極集中し過ぎやと、首都機能移転というのはやっぱり是非ともやっていただかないと、地方分権はたぶん完結しないのかなというような気になっておまして、こういう中で最も重要なのは、住民自治の本旨をその通りに具現化していくためにやはり分権だと、こういう言葉で締めくくっていただきたいと思います。

木村 なぜ今地方分権なのかという点については、さきほどの講演で、その背景を4点ばかり申し上げましたので、繰り返しては申し上げません。いずれにしても、地方分権という考え方は、これからの我が国のかたちを、どのように再構築していくのかという大きな論議の中で、一つの方向性を指し示す理念だと思います。今まで我が国は、東京中心で、広い日本を狭くしてやってきたような気がしますが、これからは、地方が大いに元気になって、「狭い日本を広くして」やっていく時代じゃないかと思います。

司会 合併っていうものをどう考えていったらいいのか。

多賀 ふたつほど言ってみたいと思うんですけども、合併論議でよく言われるのが、メリット・デメリット論議なんですね。先日、熊本県で合併の話を進めておられるところを見てきたんですけども、住民座談会で最も出てくる話は、何ですかというお話を聞いたら、やっぱりメリット・デメリット論でございます。そこで、住民の方がおっしゃるのは、だいたい役場が遠くならへんかということと、例えば税金とか国保料とか、こういったものがどないなのや、とこういう不安ですね。住民サイドから言いますとですね、要するに住みよくなって、もうちょっと負担が減ったら一番ええ、とこれが住民の一番の思いだと思うんですね。それが実現できる余地が合併にはきつとあるんだろうなという風に思っています。もうひとつは広域行政でいろんなことを進めておるけども、これの限界というのがある。これは当然ながら負担と受益の問題がありますし、立地の問題がありますし、非常にギクシャクする関係があって、利害対立で広域行政が先に進まないという課題があるんですけども、これがひとつの市になっておれば、多分うまくずっと収まってしまうんじゃないかなあと、こんなことでも、合併というのはひとつの方向としてはあるんじゃないかなという風に思っております。

木村 合併について、これは個人的な見解ですが、効率性という点からはどんどん進めるべきだという気持ちがあります。しかしながら、地域の文化やきめ細かな住民の意向の反映等といった点からあるべき姿を考えると、一概に断言しづらい面があります。決めるのは皆さん方です、大いに論議していただきたいと申し上げておきたいと思います。

司会 宮津青年会議所が540人ほどの高校生にアンケートをとられ、その中で、この町が好きですかっていう質問に対しては、約400名ぐらいの方が好きですって答えてるんです。しかしこの町に住みますかって言いますと、400人ぐらいがノーって言うてる訳なんですね。その裏腹な部分っていうのはすごく意味深なものがあるなと思っておりました。

今日は地方分権論でお話をさせていただいたんですが、最後一言ずつですね、我々が今、何をしなくちゃいけないのかという意味でのご提案とかご意見がいただければと思っております。

木村 地域のあり方を考えるとき、それぞれの地域の「差」ということを、格差がある、格差は駄目なんだととらえるのか、「差」があっても、それは個性なんだと前向きにとらえるのか、ものの見方によって目指す道筋がずいぶん変わるのじゃないかと思います。自分自身の住んでいるふるさとをもう一度見直し、一つ一つを個性ととらえて、その上で新たな道筋を見つけるという、発想の転換が必要になってくるかもしれません。自分の住んでいるその場所をかけがえのないものととらえ、より良くするために住民自身で何ができるかと考えることが、地方自治の原点の一つだと思います。

多賀 皆さん方、よくご存知だと思うんですが、私が初めて府会にでる時に、このまちに生まれてよかった、住んでよかった、豊かな人生だった、とこんな風に思えるまちにしたい、皆さん方と一緒にしたいという風なことを訴えさせていただいたんですが、今、高校生の諸君のその結果を聞いておりますとですね、非常につらいな、と。で、やっぱり、そのまちを愛するところからそのまちをどうしていこうかという議論が生まれてくるという風に私も信じておまして、そういうような形で私は今後とも活動していきたいな、皆さん方もやはり同じ気持ちと一緒に議論なり、このまちづくりの主役になっていきたいな、とお願いを申し上げて私の最後のくりとさせていただきます。